

聖書日課 『からし種』 2026.3.1-3.8

<p>3月1日 (日)</p> <p>民数記 5章</p>	<p>「わたしがそのただ中に住んでいる宿営を汚してはならない」(3節)。イスラエルの人々の中の汚れたものをことごとく宿営の外に出せと、主がモーセに仰せになった言葉。宿営は神が住んでいる場所だからだと言う。仕方なく重い皮膚病にかかってしまった者たちへの差別のように感じる。しかし、主イエスは彼らにも触れられて癒やされたことを覚えてたい。</p>
<p>2日 (月)</p> <p>民数記 6章</p>	<p>「ナジル人の誓願期間中は、頭にかみそりを当ててはならない」(5節)。ナジル人とは「神にささげられ、聖別された人」である。ナジル人というとサムソン(士師記 13 章)を思う。彼はペリシテ人の策略にはまり、髪を剃られると力が弱ることを遊女に教えてしまう。サムソンは窮地に立たされるが、神は彼の祈りに応えられ、彼の命と引換にペリシテ人に痛手を与えた。</p>
<p>3日 (火)</p> <p>民数記 7章</p>	<p>「祭壇に油が注がれる日に、指導者は祭壇奉獻のための献げ物を携えて来た」(10節)。神から指示を受けたモーセは、第一日から第十二日まで、それぞれの部族の指導者に祭壇奉獻の献げ物をするようにさせた。これには贖罪や和解の献げものもあり動物の血をもって行った。しかし、神は私たちの罪の贖いのために神の子イエスを与え、神の愛を示された。</p>
<p>4日 (水)</p> <p>民数記 8章</p>	<p>「イスラエルの人々の中からレビ人を取って、彼らを清めなさい」(6節)。主がモーセに仰せになった言葉。レビ人は清められ、神のものとなる。そして彼らは臨在の幕屋でイスラエルの人々のために贖いの儀式を行い、イスラエルの人々が聖所に近づいても、災いが起こらないようにした。主イエスは神と私たちとを日々執りなしていることを覚えてたい。</p>

聖書日課 『からし種』 2026.3.1-3.8

<p>5日 (木)</p> <p>民数記 9章</p>	<p>「死体に触れて汚れている者、あるいは遠く旅に出ている者も、主の過越祭を祝うことができる」(10節)。神がイスラエルの人々に過越祭を祝うように命じたのは、第一の月の一四日の夕暮れだが、死体に触れて汚れた者は除外された。彼らはモーセに不平を言った。神からの答えは一ヶ月遅れで過越祭を出来ることなり、全ての民の大切な祭りとなった。</p>
<p>6日 (金)</p> <p>民数記 10章</p>	<p>「銀のラッパを二本作りなさい。それは打ち出し作りとし、共同体を呼び集めたり、宿営を旅立たせるために用いなさい(2節)。二つとも吹くと共同体全体がモーセのもとに集まる。一つだけ吹く時は指導者が集まる。出陣の時や、和解の献げものときもラッパを吹いた。このことで主の御前に覚えられて、敵から救われたり、献げものの祝福を受けた。</p>
<p>7日 (土)</p> <p>民数記 11章</p>	<p>「わたし一人では、とてもこの民すべてを負うことはできません」(14節)。民は主に対して激しく不満を言ったがために、主の火が彼らに対して燃え上がったが、モーセのとりなしの祈りで収まった。しかし、まだ泣き言を言う民に主の憤りが収まらない時、モーセはこの民を負うことは出来ないと主に訴えた。主は70人の長老に主の霊を送りモーセを支えた。</p>
<p>8日 (日)</p> <p>民数記 12章</p>	<p>「彼ら(ミリアムとアロン)は更に言った。『主はモーセを通してのみ語られるというのか。我々を通して語られるのではないか』」(2節)。ミリアムとアロンは、弟モーセのみが神に重用されることに不平を抱いた。姉と兄の人間的感情としては分かる気もする。しかし神の選びは、人間の思いや感情を超える。そして、厳しくも聖書は神の前にひれ伏す信仰を求める。</p>